

「佐久間彊兄を偲ぶ」

旧内務省同期生代表 中曽根 康弘

我が畏友佐久間彊（つとむ）兄のご逝去を聞き、誠に驚愕に耐えず、去りし交友の日々を思い、心中より哀悼の誠を捧げます。

私たちは、昭和十六年四月、四十七人の友人と共に内務省に採用された同期生であります。時の人事課長は、現・外務大臣、町村信孝氏の父上であられた町村金五氏であり、課長には、古井喜實氏、灘尾弘吉氏と、後年政治家となられた方々で、時に内務省の俊秀と言われた三課長の連なる試験に合格した若者たちであり、国政同様、戦争への危機にあって、勇躍ご奉公を全うしようとした者たちでありました。我々同期生はその後、親睦を重ねて、町村金五氏の命名された「素心会」を結成し、今日に至るまで友情を重ねてきたものでありますが、戦前、戦後を通じ、日本の数奇な運命の中に翻弄され、約四分の一は戦死され、戦後六十年も経つと、懇親の会の出席者も十人を欠くに至りましたが、その会の責任者として面倒を見ていただいたのが佐久間兄であります。我々一同、「ああ、遂に佐久間兄も逝かれたか」涙を禁じ得ないものがありました。

佐久間兄は、温厚誠実であると共に、卓抜な識見と指導力の持ち主でありました。会合に於いても常に謙虚で控え目であり、学究的な人格者でありましたが、ひとたび自治や地方行政、教育の話になると、深い所信を諄々と説かれ、一同傾聴したものでありました。

戦争を生き抜いて、戦後「抜き打ち解散」と言われた昭和二十七年と、「バカヤロー解散」と言われた昭和二十八年の私も当選させて戴いた二度の突然の選

挙では、自治省の選挙課長として、些かも支障も来すことなく、円滑に選挙を施行されました。親友が自治省の選挙課長をしており、歴史に名の残る選挙を経験したことは、いまだに忘れることのできないものであります。当時は、狂瀾怒涛のような政治情勢下の日本でありましたが、政治闘争の余波を受けた突発的解散選挙については、佐久間兄は随分苦勞されて中央、地方の体制を整えられていたようでありました。

その前には長崎県で学務課長を終戦時には法制局参事官をされ、そして自治省に入られて爾来、自治省の中樞幹部として、行政局長や自治大学校長、消防庁長官を歴任され、昭和六十二年十一月には、勲二等旭日重光章の栄誉に輝いたものであります。

退官後は、地方自治行政に対する豊富な経験と、高邁な識見等により、諸種の政府の審議委員や審議会会長を兼ねておられましたが、私の内閣で教育改革を目指して臨時教育審議会を設立した時に、特に専門委員として、時の教育改革に尽瘁して頂きました。それは父上が創立された千葉経済大学短期大学部の建学の精神にあるように、「片手に論語、片手に算盤」を踏まえ、「良識と創意」を校是としている独特の教育とその学風に、私は感銘したからでもあります。その後、千葉経済大学学長や全国私学振興会会長、千葉県私学教育振興会理事長、文部省大学設置審議会委員等、混迷が続いていた大学教育について、その見識を尊重されて、推戴されたものであります。

我々、旧内務省の同期生会「素心会」の会合のある時は、教育に対する佐久間兄への質問、政治に関する私への質問がいつも中心であり、侃々諤々の議論が続いたものであります。その中にあって、長い経験に基づく佐久間兄の教育論は極めて説得力があり、共鳴者が多かったように思います。

戦前、戦後にかけて、我々と共に日本の栄誉と屈辱を味わい、官にあっては地方自治行政、民に帰っては日本の教育改革に身を以て挺身された佐久間兄は、流動しつつある国際情勢の中に、また強力な指導力を失いつつある日本の内政状況を憂いつつ旅立たれたことと思います。

七十年前に同じ志を持って、救国済民のために旧内務省を志願した素心会の会員は、国家国民のため御奉公を全うされ、また我々同期生の団結、交友の中心として指導していただいた佐久間彊（つとむ）兄のご長逝に際し、謹んで頭を垂れ、ご冥福を祈るものであります。ご家族の皆様におかれましては、ご自愛の上、ご平安の日々があられますよう、切にお祈り申し上げます。 合掌

平成十九年九月二十二日